

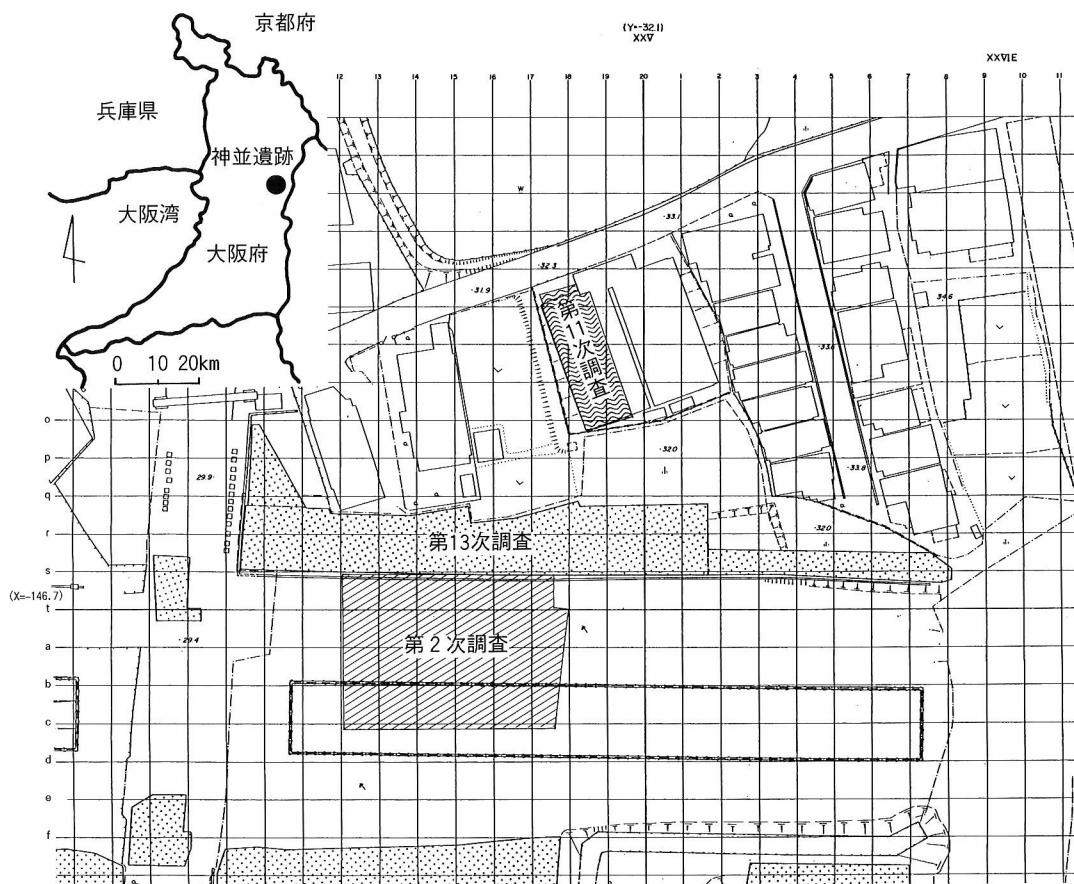
# 1. 神並遺跡の押型文土器と遺構

## I. はじめに

神並遺跡は、東大阪市東石切町1丁目を中心に広がる縄文時代～室町時代の複合遺跡である。

本遺跡は生駒山の西麓に発達する中位段丘上に立地し、標高で約30m前後を測る。遺跡の南方には生駒山地を急流する谷川（鬼虎川）があり、縄文時代早期の遺物包含層は北から南にかけての傾斜面に認められる。一方、遺跡の北方には埋没谷が確認されており、早期の生活面は、この2本の自然河川に挟まれた小地域であったことが明らかになつていている。また神並遺跡の周辺には旧石器時代～室町時代の遺跡が密集しており、埋蔵文化財の宝庫となっている。

本遺跡は、昭和56年度に行なわれた試掘調査で発見された。現在まで28次の発掘調査が実施されており、そのうち早期の押型文土器とそれに伴う遺構が確認されたのは、2次、11次、13次の3回を数えている。ここでは、その3回の調査の成果の概略を述べ、それに敷衍する若干の問題について考えてみたい。



▲神並遺跡押型文土器出土地点位置図(方眼1目盛は5 mを表わす)



▲2次 磯層面の状況



▲11次 集石土坑



▲11次 焼土坑 1



▲13次 早期の遺物包含層

## II. 調査の概要

### (1) 第2次調査 (1982.8.9~12.1)

鎌倉～室町時代の遺構面の下位には、無遺物の砂礫層があり、その下面から厚さ10～60cmの縄文時代早期遺物包含層が検出された。包含層中には、多量（コンテナー約30箱分）の押型文土器が含まれていた。石器では、有舌尖頭器2点が伴出したのをはじめ、顕著な出土を見た。そのほかでは、土偶が2点発見された。押型文土器に伴う土偶の例としては、全国で初例であった。包含層の下面には礫層があり、凹んだところに集中してみられるところから、礫上面に何らかの居住施設があったのではないかと推定された。

### (2) 第11次調査 (1987.10.1~11.16)

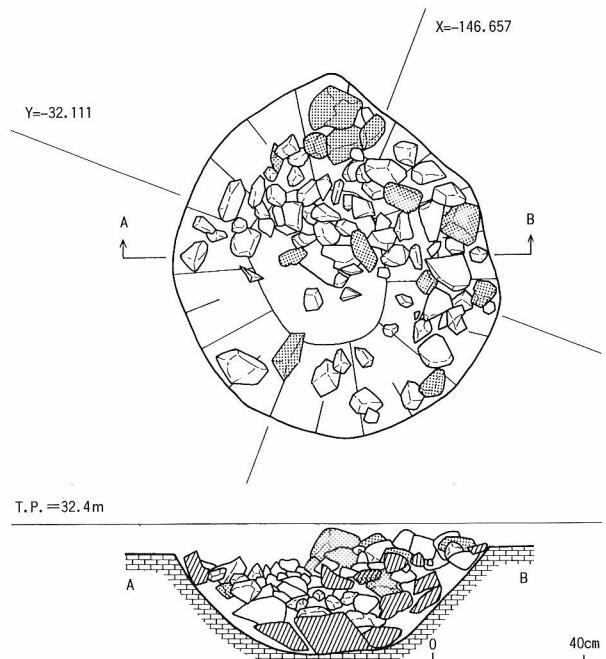
縄文時代早期の集石土坑1基と焼土坑3基、土坑7基を検出。集石土坑から約2m離れた地点に焼土坑があり、土坑側面の焼痕の存否から、調理の場と石を焼く場との違いが認められた。遺構面を覆う包含層から押型文土器や石器が出土したが、中世期以降にかなり削平されていた。また11次の遺構面と2次調査地との比高は約3mであることから、11次調査地周辺が居住域であり、谷への傾斜面に多量の土器が埋没していたことが判明した。小土偶が1点出土。

### (3) 第13次調査 (1988.9.1~89.3.25)

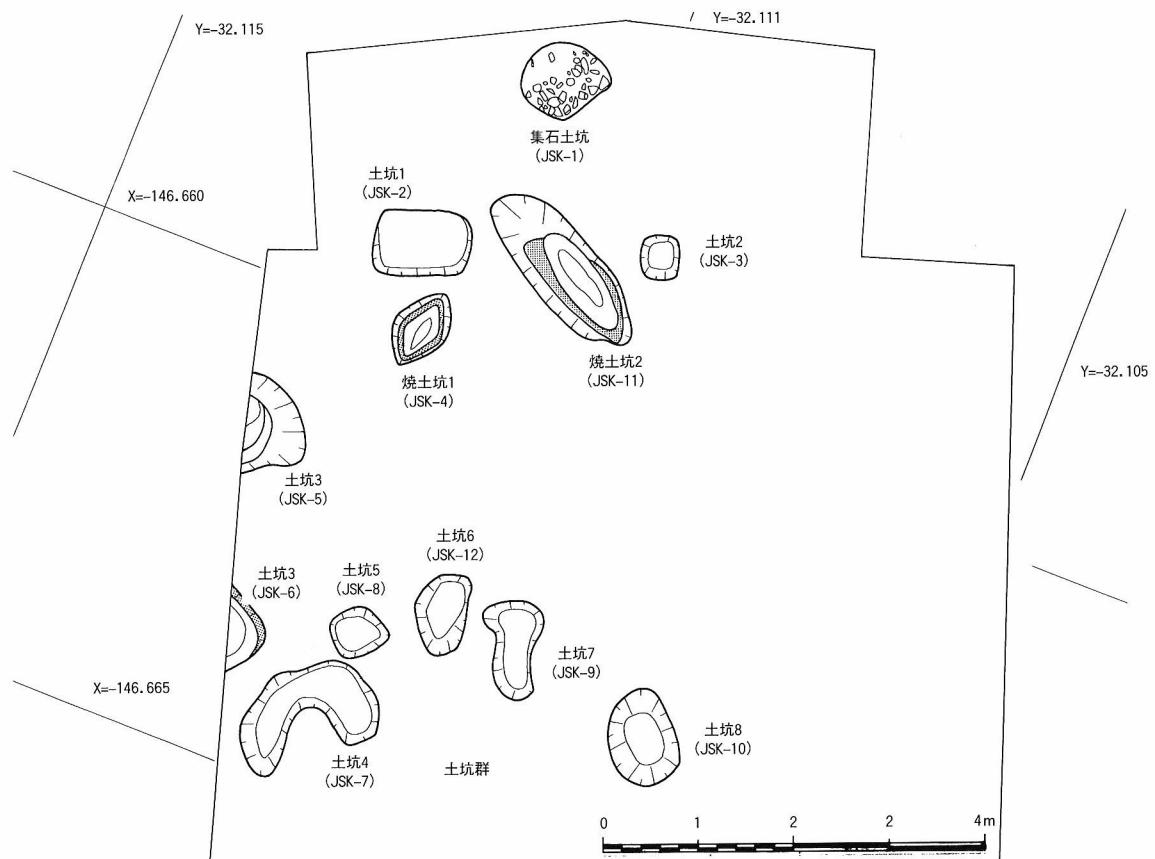
2次と11次の中間にあたる。包含層は部分的に存在するのみであった。押型文土器および有舌尖頭器が2点出土。包含層は谷状をなしていた。

### 11次検出の集石土坑

長径96cm、短径85cm、深さ33cmの楕円形を呈する土坑の中に200個以上の石が集積していた。土坑断面は緩やかなすり鉢状をなす。石は生駒山地で産する自然石である。集積の状態としては、上面はややまばらで土坑の底面に近づくにつれて密に集積していた。また土坑底面には、人頭大の石が平坦面をなすように据えられていたが、上～中位面には、集積の規則性は認められなかった。石は、かなりの焼痕があり、黒ずんだり、脆くなつて割れているのが多かった（図のアミ目の礫）。



▲集石土坑実測図



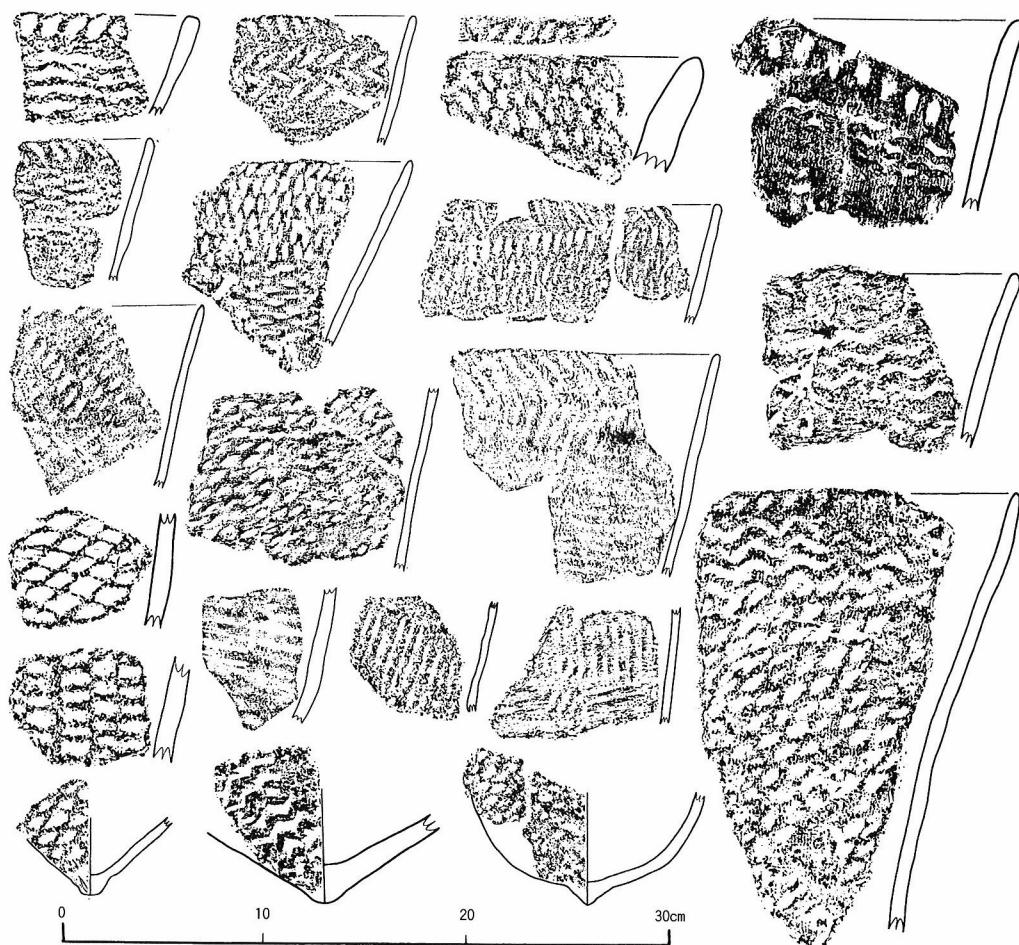
▲第11次調査検出縄文時代早期遺構平面図(アミ目は焼土層を表す)



### III. 出土遺物

#### (1) 押型文土器

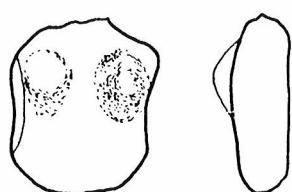
2次調査で多量の押型文土器が出土している。文様は、神宮寺式の範疇に収まるネガティブな楕円文を主体としており、ポジティブな楕円文は認められない。これは11次、13次調査も同様である。また、包含層（12層）の直上層である11層で、密接施文する山形文の土器群が出土しており、これは神宮寺式に後続する型式と考えられている。



▲ 押型文土器実測図(下村晴文・菅原章太・橋本正幸ほか『神並遺跡II』1987より転載)

## (2) 土偶

2次調査で2点、11次調査で1点の土偶が出土した。2次調査例はほぼ方形に近く、乳房と臍部のくびれのみを表現している。11次例は、2次例と比べると小型で、上下端は弧状を帶び、バイオリン型に近い形態である。



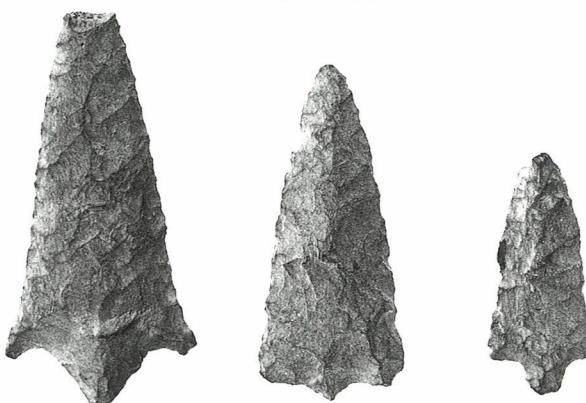
▲11次 土偶 ※実寸大



▲2次 土偶 1



▲2次 土偶 2



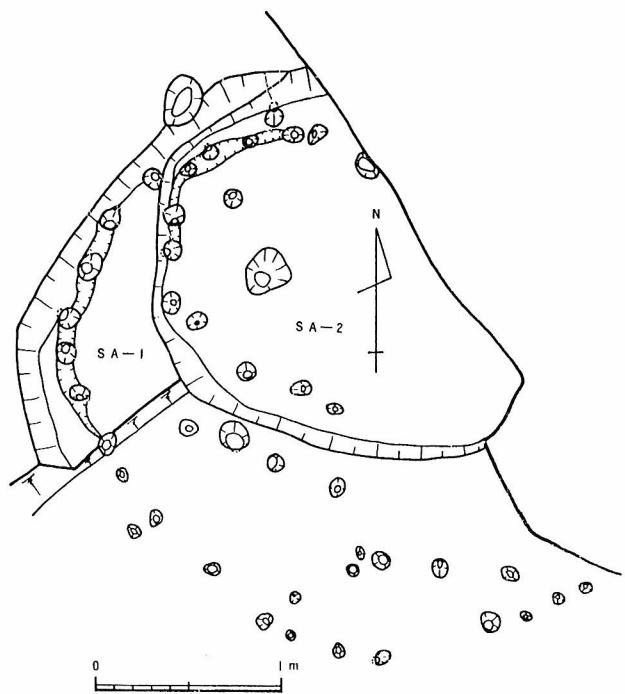
▲2次 有舌尖頭器



▲13次 有舌尖頭器出土状況



▲2次ほか 石鎌・石錐・スクレイパー



▲西岡本遺跡の竪穴住居跡（六甲山麓遺跡調査会

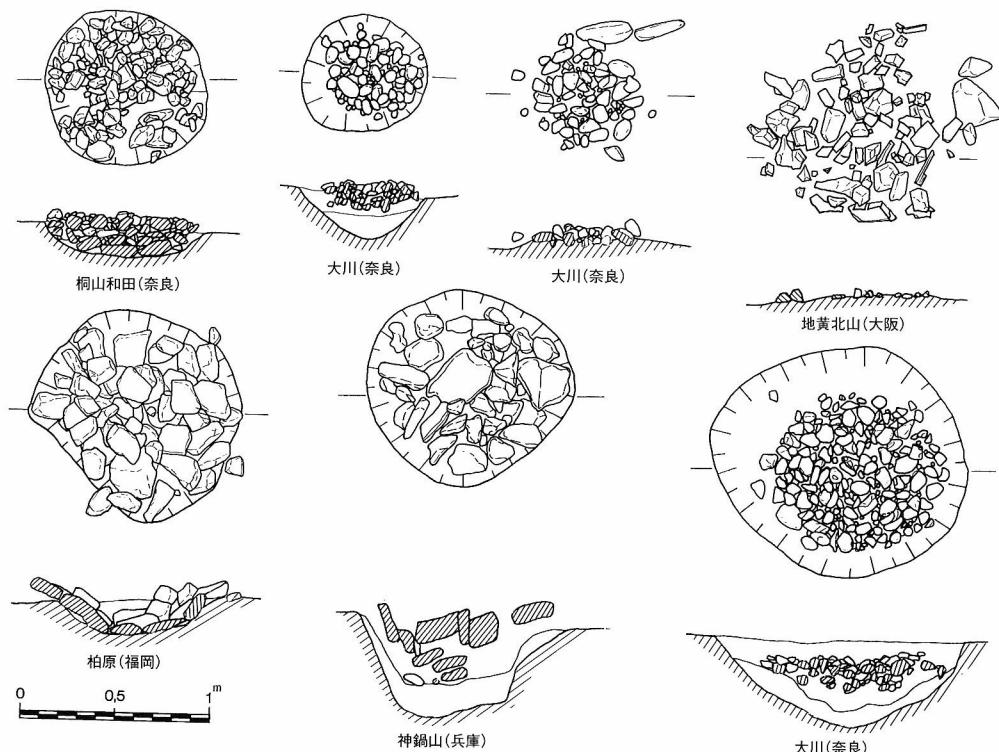
「西岡本遺跡発掘調査中間概要2」（『史料館だより』14号、1989より）

#### IV. まとめ

遺構と遺物について若干の問題点を記してまとめとしたい。

集石土坑については、検出された石の状態から、これを調理の場としての集石炉と見做して差し支えないものと思われる。そこで、近畿地方を中心として現在まで確認されている集石炉を例示的に掲げた（下図参照）。今これらを形態上から分類すると、

- I 土坑を伴わないもの
- II 土坑を伴い、  
a 石の配置に規則性のあるもの



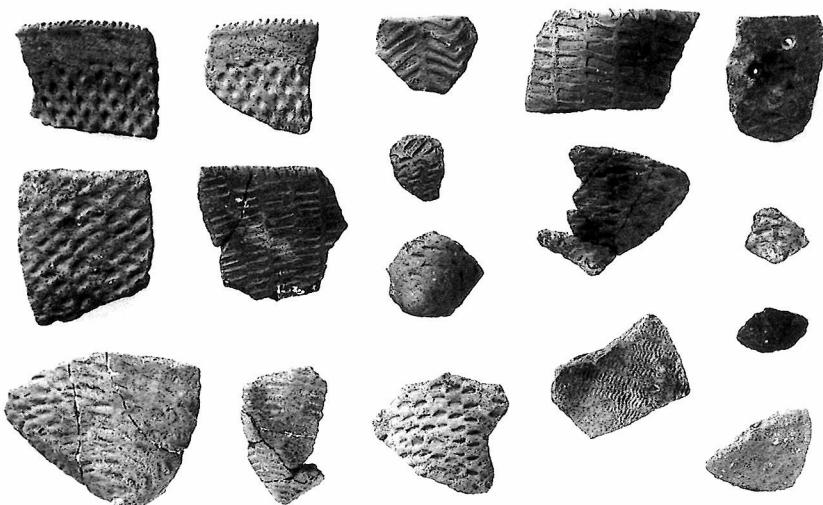
▲西日本の集石炉（押型文土器文化期）集成図（各報告書より引用、加筆）

b 規則性のないもの、に大別できる。I類は平面的に石が集結するものである。尖底の押型文土器を使った炉跡の可能性が指摘できる。II a類は石の配置に規則性を持たせることで土坑の壁面や底面を整えるもので、土坑の上面から底面まで石が充填されることが多い。II b類では土坑の上面や中面にのみ石が集積するものがみられる。

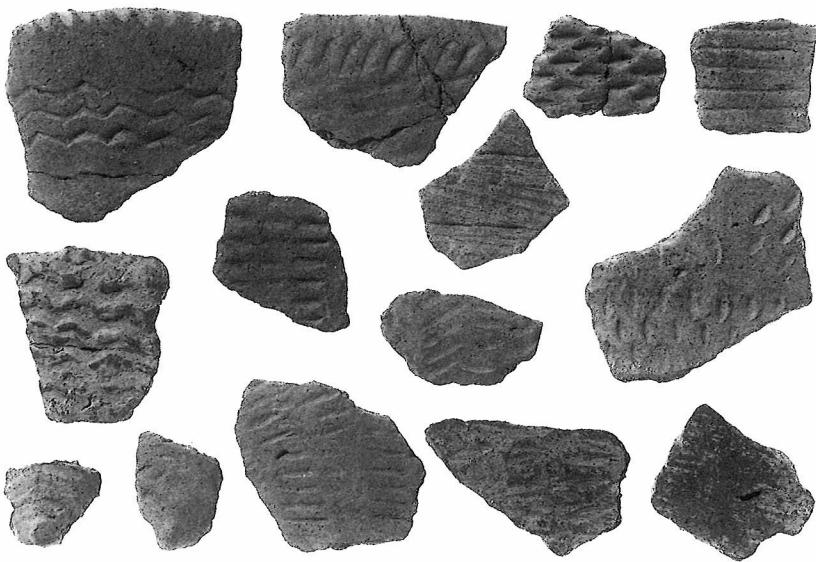
これらの形態分類の他、土坑内での火熱を受けた部位による分類がある。近畿地方では、このほか早期末の条痕文土器に伴う集石炉が大津市石山貝塚から発見されている。集石炉については、住居との関係が問題となっている。この時期の住居は小屋掛け程度の平地住居の段階から、地面を掘り凹める竪穴住居に移行しつつあり、炉は屋外に設けられている。例えば奈良県桐山和田遺跡では、約20基の集石炉が群集した状態で検出されたが、住居は未発見であった。

近畿地方の竪穴住居は、大鼻・坂倉・西出（三重県）、大川（奈良県）、別宮家野・西岡本（兵庫県）の各遺跡で見つかっている。また神並遺跡の焼土坑は先述したように、石そのものを焼いた施設と考えられ、このような集石炉と焼土坑の位置関係については、静岡県若宮遺跡・寺林南遺跡に例がある。焼土坑の形状は、本来ドーム形を呈していた例が散見される。三重県坂倉遺跡で見つかった焼土坑はその好例である。

遺物について触れておく。神並遺跡で出土した押型文土器は、2次調査11層出土の極く少量の葛籠尾崎I式を除いては、すべて神宮寺式のみであって、その意味では、神宮寺の単純、標準式遺跡といえるのである。一方、神宮寺式土器の標識遺跡である交野市神宮寺遺跡では、従来知られていたネガティブ模円文のほか、黄島式や高山寺式の土器、表裏に条痕を施した土器などが見つかっている。また、神宮寺式に先行する大川式土器は近年三重県で出土例が相次いでいる。亀山市大鼻遺跡は、台地南縁に立地し、竪穴住居7棟、焼土坑16基が検出された。出土



▲西出遺跡の押型文土器(三重県埋蔵文化財センター提供)



▲神宮寺遺跡の押型文土器(交野市教育委員会提供)

土器は200片以上を数え、大川式の古相を示す土器群（大鼻式）がある。河岸段丘上に立地する安芸郡美里村西出遺跡は竪穴住居20棟以上、焼土坑3基が発見され、3000片以上の土器が出土した。土器の時期は大川式の新しい段階、神宮寺式併行、高山寺式と多岐に亘っている。

土器の量に比べて石器が非常に少量である点が特色である。押型文土器に伴う土偶は、神並遺跡で3個、大鼻遺跡で1個発見されている。関東地方の撚糸文土器に伴う土偶と同じく、手足がなく、乳房と胴のくびれを表象しているなど、共通点が多く窺われる。神並遺跡の石器は旧石器から草創期にかけてのものが多く出土している。遺構、遺物の問題については11次調査地周辺の継続的な調査によって明らかになっていくものと思われる。(1992年稿了)

<主な参考文献>

- ① 小野塚恵子「礫の分布と集石および集石土坑」(『柵田遺跡群1978年度調査概報』八王子資料刊行会、1979年)
- ② 谷口康浩「縄文時代「集石遺構」に関する試論」(『東京考古』4、1986年)
- ③ 日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会『三重の遺跡』、1979年
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『西出遺跡』(現地説明会資料)、1989年
- ⑤ 原田昌幸「縄文時代の初期土偶」(『MUSE UM』434、1987年)
- ⑥ 東大阪市立郷土博物館『縄文文化の一万年』、1991年

<写真の提供を受けた機関とご教示いただいた方々(順不同)>

三重県埋蔵文化財センター、交野市教育委員会、片岡 肇、吉永康夫、堀田隆長、奥野和夫、小川暢子、北村博義、奥 義次、小杉康、谷口康弘、松田真一。



▲大鼻遺跡の土偶(三重県埋蔵文化財センター提供)